なんぼくしてき

南北市糴

2016

第10号

H28年度　東アジア国際シンポジウム　プレ・コラム

「大海を渡り、一支国にもたらされた土器」

H27年度　遺跡調査情報（1）

「鷹島海底遺跡　－分布調査で石弾を発見！－」

H27年度　遺跡調査情報（2）

「井樋提塘跡　－江戸時代の干拓用潮止め堤防－」

長崎県埋蔵文化財センター

H28 年度　東アジア国際シンポジウム　プレ・コラム

大海を渡り、一支国にもたらされた土器
―東アジア国際シンポジウム開催―

長崎県埋蔵文化財センター　東アジア考古学研究室　　古澤　義久

『魏志倭人伝』の対馬国（現在の対馬市に相当）と一支国（現在の壱岐市に相当）についての記述にはともに「南北 (なんぼく) 市糴 (してき)」という言葉がみられます。「糴 (てき)」という字は訓読みでは「かいよね」といい、「入」という字と「米」という字が入っているように、「米穀を買い入れる」という意味があります。そこで、南北市糴とは文字通りに解釈すれば米を買い入れていたということになりますが、大きく南や北と交易を行っていたともみることができます。

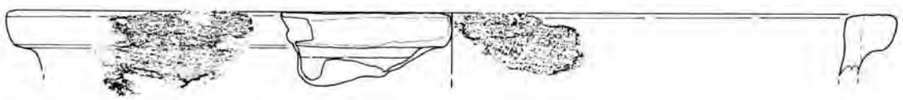
対馬国や一支国で出土した遺物には、南北の地からもたらされたとみられる、いろいろな種類の品物がありますが、そのうちの一つに、土器があります。弥生時代の一支国の中心集落である原の辻遺跡では実に多くの量の中国大陸や韓半島からもたらされた土器が出土しています。

長崎県埋蔵文化財センターが設置された 2010 年以来、東アジア考古学研究室では、これまで原の辻遺跡で発掘された資料について、未報告資料も含めて全点を再点検しました。こうして書くと、話としては簡単なことですが、原の辻遺跡では膨大な量の遺物が出土していて、未報告の資料は約 6500 箱もあり、その箱の中には土器などの遺物がぎっしり詰められています。破片であっても、一点一点丁寧に点検しなおして、一日中、大陸・半島系土器を探しました。一日の作業が終わると、遺物をさわった手は真っ黒、舞い上がったほこりで、顔には黒い汗が滲むといった様子でした。まるで、本当の発掘調査をしているようです。

そのような作業の中で、図・写真の楽浪系滑石混和土器と呼ばれる土器が発見されました。楽浪とは現在の平壌市を中心に紀元前 108 年から紀元後 313 年まで設置された漢・魏の郡です。そして、この地域では滑石と呼ばれるぬめっとした感触の白っぽい鉱物が混ぜられている土器が用いられていました。この土器は小さな破片ですが、弥生土器の小さな破片に混じって箱に収納されていました。箱から一旦、全ての土器を出して、机の上に広げてみたところ、無数の赤茶けた弥生土器の小さな破片の中で、少しだけ色味が違う土器片が眼につきました。みると、ぬめっとした表面で、滑石が含まれていることがわかりました。弥生土器には一般的に滑石が混ぜられることはありませんから、すぐに楽浪系滑石混和土器であると気がつきましたが、手にとってみて、その破片が土器の口の部分にあたることがわかりました。土器にも口の部分、真ん中の部分、底の部分などいろいろな部分がありますが、口の部分は土器の特徴をよく示す極めて重要な部分です。貴重な土器の、貴重な部分を弥生土器の破片の山の中から、みつけることができて、本当に嬉しい気持ちになったのを今でもはっきり覚えています。内側をみると布を当てた痕跡がみられます。これも楽浪系滑石混和土器の大きな特徴の一つです。

こうして、新たにみつけだした資料の実測図面をとり、拓本をとり、ようやく 2016 年 3 月に刊行した「原の辻遺跡 総集編Ⅱ」という報告書に掲載することができました。これまで、原の辻遺跡では約 700 点程度の大陸・半島系土器が出土していることが報告されていました。そして、再整理作業により新たに、566 点の資料を報告し、全てで 1,243 点（破片数）の大陸・半島系土器が出土していることが判明しました。これはどれくらい凄いことかというと、弥生時代の一つの遺跡から出土した大陸・半島系土器の量としては、ずば抜けて多く、圧倒的な差で全国第一位の量が出土したということになります。一支国の原の辻遺跡ではいかに大陸や半島との交流が盛んであったかということを窺い知ることができます。

楽浪系滑石混和土器



楽浪系滑石混和土器の実測図

こうして発見された資料について、当センターと友好交流協定を結んでいる釜山博物館のご協力を得ながら、調査・研究を進めたところ、実に多くの新発見がありました。これまで原の辻遺跡では知られていなかった種類の土器の発見、赤い色を塗った大陸・半島系土器の発見とその赤色顔料の成分分析、大陸・半島系土器や弥生土器を模倣して作られた土器についての詳細な観察による製作者の確定、原の辻遺跡における地区別の大陸・半島系土器の分布と他の遺物の分布との関係など多彩な研究成果を挙げることができ、これまで、交流の拠点とされてきた原の辻遺跡における「交流」の内容を生き生きと示す具体像が浮かび上がってきました。

新たに見つかった韓半島南部の陶質土器

当センターが毎年行っている東アジア国際シンポジウム。今年のテーマは「大海を渡り、一支国に至る。―国境の島 壱岐・原の辻遺跡における日韓交流―」です。福岡大学の武末純一教授をコーディネーターに、釜山博物館の安海成学芸研究士を講師にお招きして、新たな調査・研究成果を基に、交流の具体像を明らかにします。これまでの原の辻遺跡像を塗り替える内容ですので、是非、多くの皆様にご来場いただければと思います。

イベント情報

原の辻遺跡研究成果展

観覧無料！

期間　平成 28 年 10 月 8 日（土）
　　～平成 29 年 2 月 5 日（日）
場所　壱岐市立一支国博物館 1 階オープン収蔵庫

東アジア国際シンポジウム

大海を渡り、一支国に至る。
―国境の島　壱岐・原の辻遺跡における日韓交流―

【壱岐会場】 壱岐市立一支国博物館
平成 28 年 10 月 22 日（土）13:00 ～ 15:30
【長崎会場】 長崎歴史文化博物館
平成 28 年 10 月 23 日（日）13:30 ～ 16:00

入場無料！

第Ⅰ部 「原の辻遺跡における日韓交流」
　長崎県埋蔵文化財センター主任文化財保護主事　　古澤　義久
第Ⅱ部 「三韓時代韓半島土器文化の展開と日韓交流の一側面」
　釜山博物館学芸研究士　　安　海成（アン・ヘソン）
第Ⅲ部　パネルディスカッション「弥生時代の日韓交流」
　コーディネーター　福岡大学教授　　武末　純一

お問合せ 長崎県埋蔵文化財センター　TEL ０９２０-４５-４０８０　　長崎県埋蔵文化財センター　検索

平成 27 年度　遺跡調査情報（1）

鷹島海底遺跡の分布調査

長崎県埋蔵文化財センター　調査課　　片多　雅樹

鷹島海底遺跡

1281 年の弘安の役、いわゆる元寇の際、暴風により 4 千隻もの元軍の軍船が沈没したと推定される位置に所在する海底遺跡です。1980（昭和 55）年から松浦市（旧鷹島町）や大学が調査を開始し、鷹島南岸の汀線から 200 mの範囲、約 150 万㎡が周知の埋蔵文化財包蔵地「鷹島海底遺跡」として遺跡分布図に登載されています（昭和５７年周知）。これまでに中国産陶磁器や木製碇、船体材、武器（てつはう）、武具、銅製品など、約 4 千点が出土しています。

また平成 23 年には琉球大学と松浦市による調査で、大量の磚とともに元寇船の一部が発見され、平成 24 年 3 月 27 日には 38 万 4 千平方メートルの範囲が『鷹島 (たかしま) 神崎 (こうざき) 遺跡』として、水中遺跡として初めて国の史跡に指定されています。

調査の概要

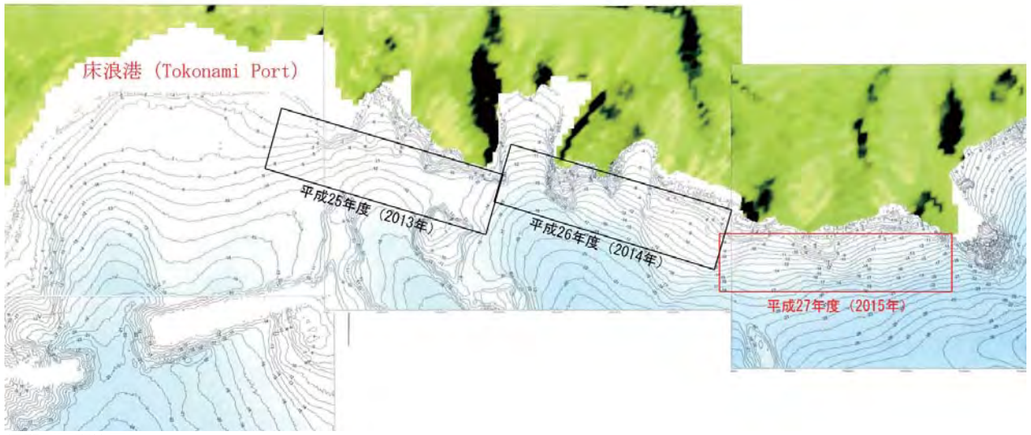
長崎県埋蔵文化財センターでは、鷹島海底遺跡内において、潜水目視調査（分布調査）を行い元寇関連遺物の詳細な分布データを蓄積することで、沈没船等重要遺物発見の糸口を探っています。潜水調査員 3 ～ 5 人のチームで潜水し、目視による遺物の確認調査（分布調査）を行うことによって、詳細な遺物分布データを集め、国指定史跡範囲の追加を目的としています。床浪港東側 200m × 50m の 1 万 ㎡ を調査区に設定し、平成 25 年度から 5 カ年計画で行っています。

鷹島海底遺跡の位置

成　果

平成 25 年度は碇石や石臼、磚、陶磁器など元寇関連の遺物 13 点を確認し、平成 26 年度は、50 点を越える磚や陶磁器など元寇関連の遺物 123 点を確認しました。

平成 27 年度は平成 26 年度調査区の更に東側 1 万㎡を調査し、106 点の遺物を確認しました。確認した遺物は写真、ビデオ、GPS にて記録しました。そして今年度はそのうちの 6 点を海底から取り上げ、展示等に活用しています。



年度別調査範囲

平成 27 年度の出土遺物

回回砲（松浦市埋蔵文化財センター所蔵）

県立長崎工業高校の生徒による復元品。回回砲とは投擲機の一種で、西アジア（イスラム圏＝回教）に起源を持つとされる。元軍が西アジアに侵攻した際に当地の攻城兵器を取り入れたともいわれる。南宋の襄陽・樊城の戦いで初めて使用された。

鷹島海底遺跡では多数の石弾が発見されているが、元軍はどのような場面で、どのようにして石弾を使おうとしたのだろう。船上からの投擲なのか、あるいは日本での陸上戦に備えてだったのか。

平成27年度　遺跡調査情報（2）

井樋提塘跡　ー江戸時代の干拓用潮止め堤防ー

長崎県埋蔵文化財センター　調査課　松元　一浩

長崎県埋蔵文化財センターでは、県内の公共工事等に伴う発掘調査も行っています。今回は、諫早市飯盛町にある江戸時代の干拓用堤防跡である「井樋提塘跡（いびていとうあと）」の発掘調査をご紹介します。

井樋提塘とは

江戸時代の元禄期に、浅い入り江であった現在の飯盛町開地区を干拓するために、河川・海水の水量調整施設として江ノ浦川河口の最狭部に築かれた石積の堤防及び水門の跡のことです。

水害と河川改良事業

井樋提塘が築かれて干拓地・開平野が出来て300年余り経った現代。昭和32年の諫早大水害や昭和57年の長崎大水害など、大雨が降るたびに江ノ浦川が氾濫し、開地区は水没する被害に見舞われてきました。平成8年、地域の望みであった河川改良事業が始まり、氾濫の一要因でもあった井樋提塘跡は全面撤去されることが決まりました。平成14年には遺跡の存在を把握するための部分的な発掘調査が行われています。

古地図にみる井樋提塘跡

今回の発掘調査について触れる前に、井樋提塘が描かれた古地図を見てみましょう。古地図は現在のところ「元禄図（領内大地図）（旧版）」と「江之浦村図」の2点が知られています。「元禄図」は、佐嘉藩諫早領を描いた古地図です。「大屋」と記された川の左岸から右岸に向かい堤塘が伸びている様子が分かります。堤塘の輪郭はいびつですが、両岸の捨て石らしき石も露出しており、潮が引いたときの状態が描かれたものかもしれません。

「元禄図（領内大地図）（旧版）」（諫早市諫早図書館蔵）

古文書にみる井樋提塘跡

井樋提塘について記された古文書に『諫早日記』があります[1]。享保18（1733）年10月11日の『諫早日記』に、「潮留めして以後、当年までおよそ36年になる・・」とあることから、遡って元禄11年に完成したものと考えられています。同じ日付の日記には他にも記述があります。井樋提塘が高潮・大波により損壊したので修復が必要なこと、正徳3（1713）年にも同様の石垣破損があったことや、今回の修理に「銀1貫42匁9部8匡」必要であることが、内訳まで含め見積り書きとして書かれています。

井樋提塘が築かれた時代

時は江戸時代中頃の元禄期、参勤交代制度が敷かれて久しい頃です。1655年の佐賀藩財政支出では、参勤交代と江戸での滞在費用が藩全体の約半分となっており、多大な負担となっていたようです。また江戸時代中頃は、農具の改良も進み新田開発が増加します。このように、井樋提塘が築かれた頃は佐賀藩諫早領でも新たな新田開発の必要に迫られていた時代だといえます。

発掘された井樋提塘跡

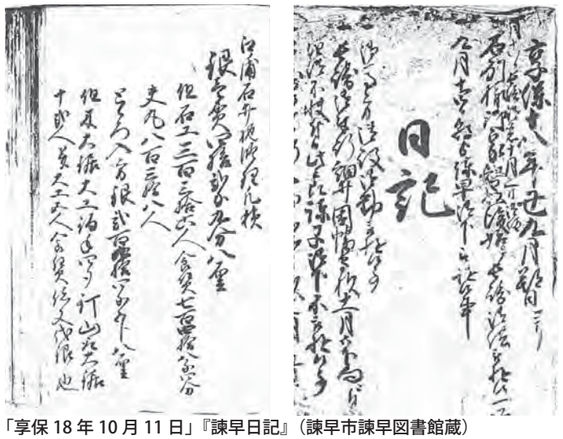
いよいよ全面発掘です。井樋提塘の眠る人工島の埋め立て土をバックホウで取り除き、人力で細かく石垣を探していくにつれ、井樋提塘の全貌が明らかになってきました。平成14年の調査で分かったことですが、丸石を積んでつくった堤防が2本合わさっています。川上側にあたる北側の堤防（北堤）と川下側にあたる南側の堤防（南堤）の2本です。

北堤を築いた後にその川下側に接して付け足すように南堤を追加で築いていることもはっきりと分かりました。残存していた堤防の高さは1.7m程度で、北堤の現存幅2.0～3.6m、南堤の現存幅5.1～5.6mの規模があります。本来の長さは現在の川幅の90m近くあったのでしょうが、埋め立てや樋門改修で削られた現在の堤防の長さは約60m程度です。

北堤の川上側石垣は、川の右岸側では丸石のみを積んでありますが、左岸側では割り石を積んでいます。また、北堤の川下側の石垣は割り石を基本に丸石でも面を綺麗に合わせるように積まれています。一方の南堤は、北堤の川下側石垣に付け足されているため、川下側石垣しかありません。しかも北堤と大きく異なり、丸石のみを面を合わせることもなく積んであります。

このように北堤と南堤では石垣の積み方が大きく異なります。また、北堤でも部位によっては築石の種類や積み方が異なっています。これは、部位毎の施工時期の違い、あるいは構築後の損壊・補修の痕跡であるなど、幾つかの可能性が考えられます。

先ほど南堤は北堤の構築後に付け足されたと述べましたが、『諫早日記』にも書かれているような損壊・補修が幾度もあったことを考えると、北堤をまず当初設計として構築し、北堤の工事中あるいは完成後に、波浪や河川流の影響を考慮し、南堤を増築したという推測が成り立つでしょう。そして、遅くとも完成期とされる元禄10年の古地図に描かれているように、この時期には「結果としての二重構造堤防」が完成していたことになります。



「享保18年10月11日」『諫早日記』（諫早市諫早図書館蔵）

松本四郎左衛門の謎

井樋提塘を築き、開干拓の礎をつくった松本四郎左衛門に関する情報は、伝承による部分が大きく、古文書での記載等はまだ多くは発見されていません。井樋提塘の完成時期はおよそ分かっていますが、いつ誰が着工したのか、佐賀藩との関わり等は不明のままです。答えは今も解読中である『諫早日記』の中にあるのかもしれません。

1 『諫早日記』の解読は、橋本桂一氏（諫早市立諫早図書館郷土資料室）・松山ヒトエ氏（元長崎県文化財保護指導委員）に協力していただきました。

北堤・南提断面（左が川上側）

北堤南辺（川下側から）

北堤北辺（川上側から）

井樋提塘跡全景（左岸側から）

井樋提塘跡全景（川下側から）